

神戸で何が起きてるんだ

気象台、測候所が騒然とした状態に陥っていたころ、東京・霞が関はまだ眠りの中にいた。国土庁のある二十六階建て中央合同庁舎第五号館。一月十七日午前六時七分、三階の情報連絡要員室に気象庁から地震情報第一報のファックスが入った。災害行政の中枢に当直職員の姿はない。民間委託の警備員二人が手にしたB5判紙には「震度5 豊岡、彦根、京都……」。神戸の震度はもちろんない。

警備員はパソコンに向かい、職員のパケベルと電話をつなぐ。「一斉情報連絡装置」を操作。発生が神戸など大都市であろうとなかろうと、震度5以上なら防災局の全員を呼び出すことになっている。画面に三十七人の名前が映し出された。一番上に防災業務課長大野慎一（四六）の名があった。国の災害対策本部設置の実務責任者である。

千葉県鎌ヶ谷市の自宅にいた大野は、ポケベルの音で目覚めた。電話が鳴る。受話器から「午前五時四十六分ごろ、地震がありました。直ちに登庁して下さい。コンピューター合成による女性の乾いた声。六時八分。

携帯ラジオのイヤホンを差し込み、一泊分の着替えを入れたバッグを手にし、新京成電鉄の鎌ヶ谷大仏駅へ向かった。

大野は両親と三人暮らし。自治省から

五年間、島根県総務部長として出向。妻の寿美子（四三）と高校二年の長男仁之（一七）、高校受験を控えた二男礼一（一四）は今も松江市に住む。九三年春、消防庁特殊災害室長に異動、同七月から国土庁へ移った。

ラジオは「京都の震度は5」。アナウンサーにも緊張感はない。「5なら、大した被害はない」。そう思った瞬間、「神戸の震度が6」と伝えた。6は地震計で測りうる最高値である。

5と6では、単に数字が一つ異なるのという意味が違う。その破壊力は5が大砲だとすると6は爆弾、いや、場合によっては原子爆弾にも匹敵する。震源は淡路島北部、地下二十キロ。都市直下型だ。地中から地上へ爆弾をさく裂させたようなものだ。震が関までの二度の乗り換えがまどろっこしい。

「非常災害対策本部の設置が必要になる」。大野の頭に膨大な作業手順が駆けめぐる。腕時計は午前七時半を指す。関東が大地震に襲われていたら、国土庁への到着は大幅に遅れていただろう。同時刻、警察庁長官の国松孝次（七三）が車で登庁。公邸にいた首相の村山富市（七二）に官邸秘書官から地震第一報がようやく入った。

消防庁震災対策指導室課長補佐の篠崎

優（四六）は、地下鉄の桜田門駅を降り、中央合同庁舎第二号館へ急ぐ。千葉市美浜区の自宅で、午前五時五十分のNHKニュースを見た。「兵庫あたりか」。妻弘子（三七）と二十年前の兵庫県地方課時代を思い返した。アナウンサーが「震度6」

を伝え、その後言わない。本当に6かが、気になっていた。

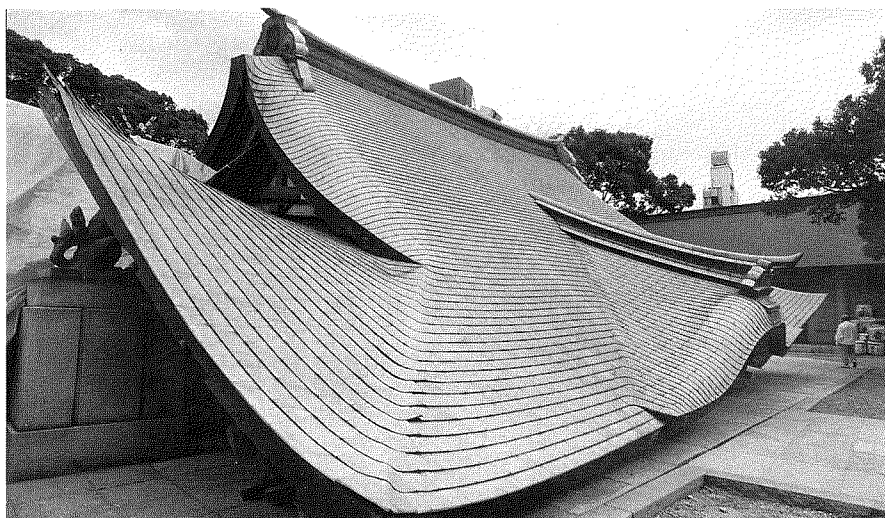
震災対策指導室がある第二号館の二階へ階段を駆け上がる。数人の職員が情報収集に入っていた。「やっぱり6か」「そうです。もう驚いている暇はない。

まず被害規模の把握だ。兵庫県消防交通安全課に尋ねれば、概要はつかめるはずだ。それから全国の消防隊を被災地に応援に出す広域消防派遣を決めよう。篠崎の脳裏に、震が関のごく当たり前の手順が浮かんだ。

「早く、県に聞い

てくれ」「何もつかめていません」。ほかの職員が受話器を取っていた。神戸市消防局にかけているという。災害時でも東京の本庁から直接、市町村と連絡を取ることがありえない。「神戸市にかけないとダメか」。そのことは、県との連絡網が完全に途絶した状態にあることを物語っていた。

神戸でいったい何が起きているのか。



生田神社拝殿

戦災で焼け、1959年に再建。建設費約1億3000万円。ヒノキ造りで屋根は銅板ぶき（神戸市中央区、2月2日撮影）